

## 苦境から前向きなことを考える

大和田囲碁同好会 成田 滋

ヴィンス・ロンバルディというアメフトのコーチがいます。ウィスコンシン州のグリーンベイ・パッカーズを率い、二度のスーパーボールを制した名監督です。アメフトは緻密な戦略で攻撃と防御を繰り返すチームスポーツです。猛烈なタックルがあり、随所にノックダウンが見られます。ロンバルディは、コーチとして数々の名言を残しています。その中に【ノックダウンされたかどうかは、たいした問題ではない、大事なのは立ち上がるかどうかである】という言葉があります。

コロナ禍により八碁連は対面での大会が中止を余儀なくされました。今も定例会は中止と再開を繰り返す有様です。そのような状況にあって、なんとかして対局を楽しもうとする努力が続いています。それがオンラインとかネットワークを利用した新しい対局や研修です。対局の他、リモートワーク、オンライン授業などの社会現象が進行しています。パソコンやネットワークといったITに縁遠かった人々も、この技術によって生活様式を変えつつあります。苦境にあって世の中を変えるような現象です。

八碁連の姿で嬉しいことは、オンライン対局が進行する上で、パソコンやインターネットを使いこなせていなかった会員が、他の会員の助けを受けて、対局できるようになってきたことです。こうした助け合いに「心遣い」が感じられます。「苦境から共に前向きなことを考える」雰囲気です。



苦境がもたらす別の例です。それは、互いに思いやるような人間の行動です。互いに心配しあい、電話をし、メールで消息を確かめ合うという行動です。気遣いや心配り、共感、そして尊敬といったことを意識することが高まったことです。私たちは、離れ離れになっている人や消息がわからなくなっている人たちの媒介役、仲介役になってきています。精神的にノックダウンしている人を立ち上がらせる伴走者になっているようです。

「コロナに打ち克とう」と気張ったり「不要不急の外出を避けよう」と叫ん

でも、外にでて新鮮な空気を吸いたくなるものです。ある人にとっては不要でも、ある人にとってはとても必要なことがあります。文化や芸術はどうでしょうか。本当に不要不急のカテゴリーに当てはまるのでしょうか。囲碁はどうでしょうか。ただ不安だけをいたずらに強調するのではなく、「こうしたことができますよ」、「それを支援できますよ」とわかりやすく伝えることができれば、きっと会員の誰かが手を上げて助け合いが生まれます。

八碁連は、法人格を持たない任意団体(Voluntary association)です。英語名が示すように「自主性」や「自発性」が会員に求められます。法人と比べて社会的な信用は劣りますが、行動の自由度は任意団体に与えられている大きな強みです。互助や互恵の精神のさらなる浸透の努力が、今八碁連に求められている1つの課題といえましょう。